

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT
2014.9. VOL.25

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

東京医科歯科大学の奈良教授にカリキュラム改革についてご講演いただきました

ご存知の方も多いことと思いますが、現在わが国の80大学すべての医学部は、国際基準に対応した医学教育を提供するため、大幅なカリキュラム改革に取り組む必要性に迫られております。これは、米国での医師の臨床研修資格を認証する組織ECFMGが「2023年以降は、認証評価を受けた医学部の卒業生のみ認証する」という通告をしたことに端を発しております。本質的には国民によりよい医療を届けるために学生教育をより充実させるという意味合いもあり、通告をよい機会と捉え、カリキュラム企画運営委員会が中心となり、原点に立ち返って考えながら、カリキュラム改革を進めております。

M1-3の教育に関しては早野教授が、M4-6の教育にかけては祖父江教授がワーキンググループ長として、具体的な改革に取り組んでくださっております。昨年は、全分野の教員と学生の参加を得て、2度の医学教育フォーラムを開催し、名市大医学部の教育アウトカムを定めました。

一方では、なぜ今、医学教育改革なのか、といった背景や医学教育の世界の現状など、なかなか教員や学生のみならず、的確な情報を届けることができずおりました。

そこで、先日6月26日には、わが国の医学教育改革のリーダー的存在であります東京医科歯科大学の奈良信雄教授に「国際基準に対応した医学教育:医学教育の質保証と医学教育カリキュラム改革」と題してご講演いただきました。奈良先生のご講演では、国際基準から見たわが国の医学教育に求められる改善点、臨床実習のあり方や医学教育の質保証の必要性、米国におけるカリキュラムの実際などをお話いただき、世界におけるわが国の現状を把握するために大変有意義な機会となりました。

日本の医療は世界に誇るべきよい面もたくさんございますが、「Protect the Public Health」のために、よりよい教育を提供して参りたいと思います。カリキュラム改革には全ての教員の意識改革と協力が必要です。診療、研究でお忙しい中、恐縮ですが、引き続きご助力賜りますようどうかよろしくお願い申し上げます。

文責:カリキュラム企画・運営委員会 委員長 明智 龍男
(精神・認知・行動医学分野 教授)



講演の様子



意見交換も盛んに行われ、有意義な講演となりました

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

連携病院—愛知県厚生連 知多厚生病院

知多厚生病院は、1964年6月に愛知県厚生連9番目の病院として知多郡美浜町に開設され、以後知多半島南部における急性期医療と救急医療の拠点病院として診療に携わってまいりました。1999年から知多半島二次医療圏の第二種感染症指定医療機関、2002年からは篠島や日間賀島など離島医療を支援するべき地医療拠点病院、2004年からは臨床研修指定病院、2007年から災害拠点病院に指定されるなど公的医療機関として重要な責務を果たしております。

病床数259床（一般149床、回復期50床、療養病床54床、感染症6床）で、急性期医療圏は美浜町、南知多町、武豊町および常滑市の南部であり、知多南部消防組合の救急搬送患者の80%を受け入れています。また、当院の特徴として篠島に離島診療所を有しています。1991年に愛知県および南知多町の要請により知多厚生病院附属篠島診療所を開設しました。人口約2000人の島民に対して急性期医療、慢性期医療、訪問診療など積極的に展開しています。さらに篠島診療所は医師初期臨床研修の地域医療研修の場として研修医に離島医療を体験してもらっています。

当院は災害拠点病院としてDMATを編成するとともに、南海トラフ巨大地震などを想定した訓練を住民、行政、医師会、保健所、救急隊、警察、自衛隊などと連携し毎年実施し、災害時医療に備えています。また、知多半島二次医療圏の感染症指定医療機関として陰圧病床を6床有し、新型インフルエンザなどの新興感染症に対する訓練を厚生労働省・中部国際空港検疫所と実施しています。

一方、高齢化が急速に進行するなか、医療の場は病院から地域へと急速に広がっています。知多厚生病院は『保健・医療・福祉の活動を通じて、地域住民が安心して暮らせる地域社会づくりに貢献する』という理念に基づき、行政・医師会・JAなど様々な機関との連携により『Aging in Place知多半島モデル』を構築し、さらに様々な情報を発信し、『世界健康半島』の実現を目指して全力を尽くしていく所存です。

病院長 宮本 忠壽



知多厚生病院 外観



知多厚生病院正面ホール



篠島診療所

教育

市立高校生が、夏休みに医学研究科で体験学習!

数年前から実施していた名古屋市立向陽高校との高大連携の一つ、「夏休み体験学習会」が拡大しました。

新たに菊里高校、桜台高校、名東高校の3校が加わり、計31名の医療系学部を目指す市立高校生が、夏休み期間を利用し、基礎医学教室（細菌学、再生医学、遺伝子制御学、実験動物学、分子神経生物学、脳神経生理学）において、医学研究の一端を1-2日間体験しました。

本企画を通じ、「知ること」「学ぶこと」の新鮮な喜び・感動を高校へと伝えられたと思います。ご協力頂いた先生には感謝申し上げますとともに、来年以降もご協力をお願いします。

また本年度からは、市立高校の理科系教員にも門戸を広げ、のべ18名の先生方が一高校生と一緒に学びました。未来の高校生に向けても、プラスになるものと感じています。

「市立高校生の夏休み体験学習」は、今後も進化し続けます!

(文責:脳神経生理学分野 教授 飛田 秀樹)



脳神経生理学での体験学習の様子

研究者紹介



Tomoya Kataoka

片岡 智哉(かたおか ともや) 臨床薬理学分野(助教)

専門:男性性機能障害、アンドロロジー、薬理学

私は名古屋市立大学薬学部を卒業後、同大学院薬学研究科博士課程を修了後、2014年4月より臨床薬理学分野へ着任致しました。

我々は男性性機能障害発症メカニズムの解明および、男性性機能障害に対する新規薬物療法の開発に取り組んでおり、私は男性ホルモンに着目して研究を行っております。男性ホルモンは加齢だけでなく、糖尿病などの生活習慣病によっても低下し、様々な身体機能の低下を引き起こしますが、そのメカニズムは完全には解明されていません。このメカニズムの解明は、QOLの向上に大きく貢献できると考え、薬理学的手法や分子生物学的手法を用いて検討し、男性ホルモン低下症に対する新規薬物療法を模索しております。

近年の論文: *J Sex Med.* 11:920-929. (2014), *Int J Urol.* 21:608-12. (2014), *Int J Impot Res.* 25:201-205. (2013), *J Sex Med.* 10:2423-2429. (2013), *J Pharmacol Sci.* 120:250-253. (2012)



Yumi Endo

遠藤 友美(えんどう ゆみ) 腫瘍・免疫外科学分野(病院講師)

専門:乳癌

エストロゲンレセプター陽性乳癌は乳癌の約8割を占め、私たちの教室でも主要なテーマの一つです。このエストロゲンレセプター陽性乳癌は、近年では2つのサブタイプに分かれることが報告され、2つのサブタイプ間では治療への反応や予後が異なります。私はこの2つのサブタイプの違いにマイクロRNAが関与するという仮定のもとに研究に取り組んできました。上記の研究の際に様々な実験手技を学ぶことができ、最近ではエストロゲンレセプター陽性乳癌だけでなく、乳癌の体細胞変異と予後や治療効果との関係を中心に研究を続けています。

近年の論文: *Jpn J Clin Oncol.* 2014 Jul;44(7):619-23. *Case Rep Oncol Med.* 2013;2013:164761. *Endocr Relat Cancer.* 2013 Feb 18;20(1):91-102. *Int J Clin Oncol.* 2011 Oct;16(5):512-8.



Tsunamasa Watanabe

渡邊 綱正(わたなべ つなまさ) 病態医科学・ウイルス学分野(講師)

専門:肝臓病、肝炎ウイルス、免疫療法

近年の肝炎ウイルス疾患(B型肝炎、C型肝炎)治療には様々な薬が登場し、熟考することなく最新の薬を投与すれば、かなりの確率で完治や完解が得られるようになってきました。しかしながら長年にわたり人類と共存してきたウイルスは、巧みな手法で自身の特徴を変化させ、生きながらえる手段を講じており、画一化した方法で治療を行うと後に仇討にあうことが懸念されます。したがって、疾患の病態を理解し、適切な時期に適切な対処を行うことが重要であり、その科学的根拠を提示することを目指して臨床と研究の両面から肝臓疾患ならびにウイルス感染症の診療にあたっています。具体的には、ウイルスの複製メカニズム、感染様式、治療薬の作用機序解明、生体側の応答に関して研究を続けております。

近年の論文: *Sci Rep* 4: 4750 (2014), *J Clin Microbiol* 51: 4275-6 (2013), *PLoS One* 8: e66920 (2013), *GUT* 62: 1340-46 (2013), *Gastroenterology* 143: 78-87 (2012)



Rika Nagasaki

長崎 理香(ながさき りか) 新生児・小児医学分野(助教)

専門:新生児 小児循環器

画像診断技術の向上により、様々な疾患が胎児期に診断される機会が増えています。大切な赤ちゃんがお母さんのお腹にいるときから家族に関わり、色々な治療を経て、家族の一員として退院できるように、チーム一体となって医療を行っています。同時に、近隣の産科・小児科の先生方、検査技師の方々と協力をして、胎児診断の技術を向上させるべく努力をしています。また、近年の目覚ましい外科治療の進歩に伴い、以前は救命できなかった複雑心疾患のお子さんが元気に退院、成長されるようになりました。お子さんの成長に伴って生じる問題にも対応できるよう、家族に寄り添った医療を心掛けています。

近年の論文: *Eur J Pediatr.* 2013 Aug 11. *Pediatr Neurol.* 2012 Jul ; 47(1):35-9.

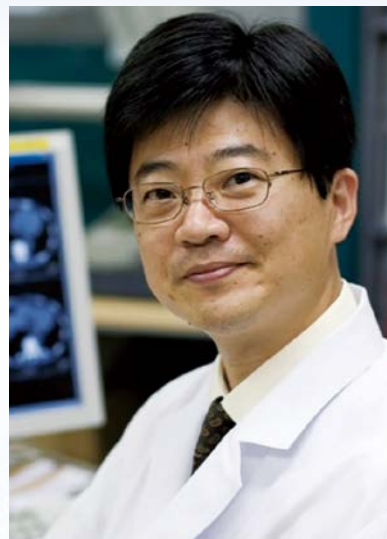
新任教授のご紹介

血液・腫瘍内科学分野 — 飯田 真介 教授

この度平成26年5月1日付けで、本学に新設されました血液・腫瘍内科学分野の教授を拝命致しました。本分野の設立にご尽力いただきました方々に深謝申し上げます。

私は昭和62年に名古屋市立大学医学部を卒業後、旧第二内科に入局し、愛知県がんセンターと米国コロンビア大学でのがんの臨床と研究の研鑽を経て、平成9年から母校に戻り診療と研究、そして後輩の指導を担当してまいりました。専門は造血器腫瘍の分子病態研究、分子標的療法開発、がん免疫療法開発、そして医師主導臨床試験の実施です。今後は造血器腫瘍に加えて肉腫や原発不明がんなどの稀少がん患者さんの拠り所になれるような診療・研究体制を築きたいと考えています。がん治療や造血幹細胞移植において最も重要なのはチーム医療です。化学療法部、緩和ケアチーム、看護部、薬剤部、輸血部、栄養管理部、そして関連診療科と一丸となり、一人でも多くの患者さんの力になりたいと思います。

私が自分の目指す診療や研究に没頭出来たのは、学内外を問わず多くの上司、先輩や同僚に支えられてきたからです。今後は、若い医師が夢や目標を実現できるような環境作り、教室運営を行ってゆく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



飯田 真介 教授

遺伝子制御学分野 — 近藤 豊 教授

この度平成26年5月1日付けで分子医学研究所遺伝子制御学分野(生体高分子部門)の教授を拝命いたしました。講座名は「疾患を遺伝子機能から解明し医療につなげる」という期待を込め遺伝子制御学(Department of Epigenomics)といたしました。私は平成2年名古屋市立大学医学部卒業後、消化器内科医として診療に従事し、平成8年同大学院医学研究科に入学したのを機に研究をスタートしました。私が研究している「エピジェネティクス」とは、細胞核内のDNA上の遺伝子をどのように使うか、その使い方を決める仕組みのことです。ほとんどの生命現象に関わっており大切なメカニズムですので、その異常はがんや代謝疾患、神経疾患などの様々な疾患発症につながります。またエピジェネティクス異常は環境因子によっても誘発され、時には世代を超えて異常が伝わることも分かってきました。こうした一つ一つの基本的生命原理を細胞レベルで解明し、個体レベルにつなげる研究を展開することで、今まで分からなかった様々な生命現象や疾患発生のメカニズムを明らかにしていきたいと考えます。これまでに名古屋市立大学で諸先輩たちが築き上げてこられた気概に学び、活気あふれる教室を創り上げたいと考えます。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



近藤 豊 教授

新任教授のご紹介

網膜血管生物学分野 — 植村 明嘉 寄附講座教授

この度平成26年4月1日付で本学に新設されました網膜血管生物学寄附講座教授の任を拝命致しました。

私は平成8年に京都大学を卒業後、3年間の眼科臨床研修を経て京都大学大学院にて網膜血管の基礎研究を開始いたしました。その後も理化学研究所(神戸市)および神戸大学にて網膜血管研究を継続してまいりました。眼科領域では糖尿病網膜症や加齢黄斑変性など、血管異常により視機能が低下する疾患が数多くあり、最近では血管内皮細胞増殖因子(VEGF)を標的とした薬物療法が広く普及しております。しかしVEGF阻害療法では十分な治療効果を得られないことがあり、新たな創薬開発が喫緊の課題となっています。本寄附講座では独自に開発した糖尿病網膜症モデルマウスを用いることにより、網膜血管異常の細胞・分子機構を解明し、新規創薬標的分子を同定することを目標に研究を進めてまいります。同時に、網膜血管研究から得られた知見を基にして血管生物学の普遍的原理を明らかにし、種々の血管病変に対する治療法の開発に応用することをめざしています。名古屋市立大発の創薬開発に向けて、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



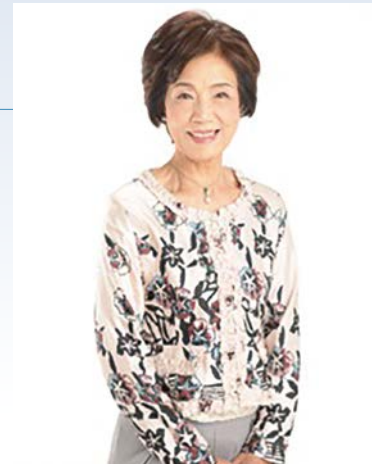
植村 明嘉 寄附講座教授

OBのご紹介

昭和44年(1969年)卒業の津田喬子先生に、女性医師へのメッセージをいただきました!

1969年に名市大を卒業後、麻酔学教室へ入局し麻酔科学、集中治療医学、疼痛制御学(ペインクリニック)および救急医学を学びました。麻酔科医をめざすこととなった第一は最も興味をひかれた分野であったこと、第二は創設3年という若い教室でありトップの教授に男女平等意識があったことです。1968年に男女雇用機会均等法が施行され、1999年に男女共同参画社会基本法が施行されたわが国ですが、目的とする「共同参画」社会にはほど遠い現状です。なぜ、推進できていないのでしょうか。それも、男女平等で教育を受け、医師国家試験も男女平等に施行されるようになっている医療界においてです。

私は、これからの女性医師のキャリア意識の保持、平等に働ける環境の整備、そして男性医師の意識改革が、共同参画の推進の鍵を握っていると考えます。その中で女性医師は、自らがプロフェッショナルとして自身のキャリアを継続しつつ、提示された仕事にどん欲に挑戦すべきです。そして、組織の意思決定の場へ積極的に進出していきたいと思えます。もう一つ重要なことは、仕事も家庭も理想的には男女平等参画であることへの社会全体の意識の改革です。



名古屋市立東部医療センター名誉院長
津田 喬子 先生

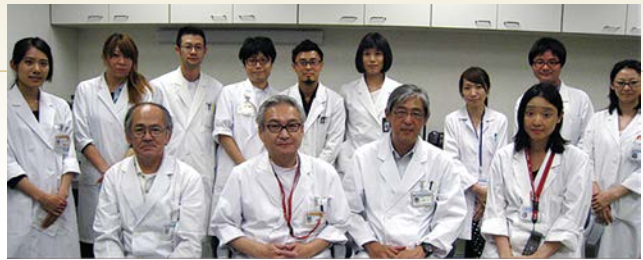


名古屋市病院局事務スタッフと共に
(名古屋市立東部医療センター長時代)

病理診断部:そのあゆみと活動

1. 病理部から病理診断部へ

病理診断部の歴史は古く、市大病院開設とともに診療に貢献してきました。市大病院には病院開設以来の病理材料が保管されています。当初は中央検査部の一部門でしたが、平成5年(1993)に病理部として独立しました。以来20年以上が経過しましたが、今年(2014)4月に病理診断部と名称変更しました。この背景には、病理診断が医療機能評価において重要視されていることがあります。



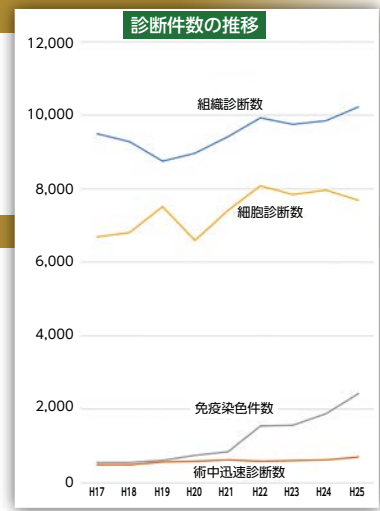
(上左から)宮崎技師、澄川技師、松井技師、山田技師、伊藤医師、小椋医師、藤井医師、加藤医師、石川医師
(下左から)藤吉医師、佐藤技師(主幹)、稲垣医師(部長)、山下医師(副部長)

2. 診療報酬点数表第13部 病理診断の新設

病理診断の持つ医療寄与の大きさ、がん治療の均てん化などを背景にして、平成20年(2008)に医療法が改正されました。診療報酬点数表で第3部検査の中にあつた病理学的検査が第13部に移り、名称も病理診断に変更されました。病理診断は、以前にはしばしば病理“検査”と呼ばれていましたが、専門性の高い医師の判断により行われることを反映して、現在では病理“診断”と呼ばれています。

3. 病理診断部の活動

病理診断は主に顕微鏡を用いて行われます。現代医療では、病理診断医よりしばしば治療方針や予後が決定されるため、病理診断は医療の中で大変重要な位置を占めています。このため病理診断はしばしば“最終診断”と呼ばれます。また、人体組織や臓器は人体から切り離された時から、病理診断医の責任範囲となります。病理診断医は診療科から独立した立場で医療行為を評価するため、しばしば“医療現場の裁判官”と呼ばれます。病理診断部の業務には組織診断(生検・切除された臓器)、細胞診断、術中迅速診断、免疫染色、遺伝子診断、病理解剖があります。グラフに示しますように、主な業務の診断件数はここ数年、右肩上がりを続けています。これらの業務に加え、臨床病理検討会(CPC)、カンサーボード、臨床各科とのカンファレンスなどの活動を頻回に行っています。



4. 病理専門医

病理専門医は病理診断を行う専門職であり、昭和54年(1979)に制度が発足しました。これは日本専門医機構が認定する19基本診療領域専門医の一つであり、病理学における臨床的側面をよく表しています。またがん診療連携拠点病院には病理診断医の配置が必要であり、カンサーボードには病理診断医の参加が必須となっています。残念なことに、2012年現在、日本の病理専門医数は少なく(人口6万人に1人に相当)、専門医不足の解決が急務です。

5. 最後に

現在の病理学は古典的な形態学を脱して、分子生物学や発生生物学の領域も複合した総合科学と変化しています。病理診断部では免疫染色に加え、PCR、FISHといった分子生物学技法を用いて正確な病理診断を提供しています。また病理診断をより迅速に主治医に届けるようワークフローの改善に努めています。病理診断部に対してご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

文責:病院病理診断部 部長 稲垣 宏
(臨床病態病理学 教授)

病理診断部の業務と活動

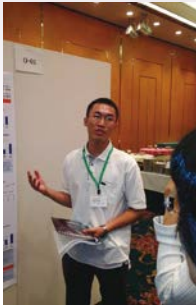
- 生検組織診断:臨床検査法の進歩により、臨床・画像診断の精度は向上しましたが、悪性腫瘍や難しい病気の診断は病理診断により確定されます。
- 切除された臓器の組織診断:摘出された臓器・組織は、病理診断医が肉眼で病変を確認し、診断に必要な部分だけを切り出します。臨床検査技師が作製した顕微鏡標本を病理診断医が顕微鏡で観察し、病理診断を行います。
- 細胞診断:ごく微量な検体中に異常細胞があるかを診断するもので、専門資格を持つ臨床検査技師がスクリーニングし、悪性が疑われる病変は病理診断医が最終的に診断します。
- 術中迅速診断:手術中に採取された病変組織を迅速に病理診断します。切除断端での腫瘍の有無や他臓器への腫瘍転移の有無を診断し、切除範囲や治療方針の決定に重要な情報を与えます。
- 免疫染色:形態学的観察では病理診断が困難な病変に対して、免疫染色を積極的に行っています。病理診断部では120種類以上の抗体を用意しています。
- 遺伝子診断:診断確定に重要な分子生物学的技術を導入し、病理診断や分子標的治療選択のために役立っています。
- 病理解剖:病理解剖は、死因、臨床判断や治療の適否を病理学的に検討するものです。ある研究によると20%の臨床判断が不適切であったというデータがあります。
- CPC:病理解剖によって得られた知見を主治医や関連の医療従事者と共に検討する会で、病院の医療水準を向上させる上で必要不可欠なものです。新医師臨床研修制度ではCPCレポートの作成は必須となっています。また内科学会等の施設認定基準の一つとなっています。
- カンサーボード:病理診断医を含め、治療・診断に携わる医師や医療スタッフ等が参集し、がん患者について治療方針等について意見交換するための検討会のことをいいます。
- 臨床各科とのカンファレンス:各科の医師と定期的にカンファレンスを開催し、診断の正確さの維持に努め、病理診断にもとづいた具体的な治療方針の議論を行っています。

学生生活

第4回全国合同リトリートに参加しました!

M4 丸本 良介さん

今回初めてMD-PhDリトリートに参加させていただきました。いろいろな大学のMD-PhDコースの人達や、講演して下さった先生達の話が聞くことができたり、つたないながらもポスター発表をさせて頂いたり、とても有意義でやる気をもらえるような経験をすることができました。また次回も参加したいです。



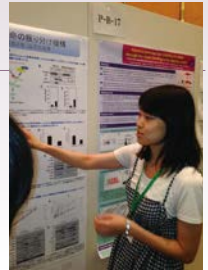
M3 宮本 拓哉さん

自分の研究を発表するとともに他の学生の発表も聞ける貴重な場であり、全国より集まった研究医を目指す学生の集まりということで、お互いとても良い刺激となる熱い議論が繰り広げられました。この仲間とともに将来の医療を先導していくような研究がしたいと感じた夏でした。



M4 山下 絵美里さん

リトリートとは、MD研究者育成プログラムのことです。研究に取り組む大学生が集まって、研究成果を発表したり、研究をしている大学生や研究者との交流を深めたりできます。私にとってのリトリートでの収穫は主に3つあります。研究成果の発表、ディスカッションを通して今の研究テーマについて考えを深められたこと、大学ごとのカリキュラムや研究者育成の体制の違いを知れたこと、そして将来設計が以前より具体化したということです。今後は、リトリートでもらった多くの刺激を活かせる大学生活を送りたいと思います。



第55回川澄祭【Treat & treat】が始まります! 実行委員長のM4北村浩平さんにききました

第55回川澄祭実行委員長を務めさせていただきます医学部4年の北村浩平と申します。本年度の川澄祭は10月31日から3日間にわたり開催する運びとなりました。開催にあたり、数々のご支援を頂いた同窓会、先生方をはじめとする全ての方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本年度の川澄祭のテーマは「Treat & treat」です。本学祭が10月31日に始まることから、ハロウィンの「Trick or Treat」をモチーフにしたテーマで、二つ目のTreatは治療、二つ目のtreatはもてなしを意味しています。これには、本学祭の特色である医療系企画の模擬病院(Treat)と、ステージ企画及び模擬店などの、学園祭を活気付ける楽しい企画(treat)を両立させた川澄祭にしたいという意味を込めています。

川澄祭実行委員会は部活やサークルのように厳格な規則を設けてはいません。年度が替わる度に、新しいメンバーで全く異なる体制を敷くこともできる非常に自由度の高い集団です。もちろん、それ故に苦労する場面も少なくはありません。しかし、普段は部活やサークルなど、それぞれ異なる場所で活動している人が誰でも参加でき、川澄キャンパス全体で盛り上げていくことができるという大きな魅力があると思います。私自身、その魅力に惹かれて4年間実行委員を続けてきました。そんな川澄祭も、私達4年生にとっては今回で最後となります。歴代の先輩方が築いてきたこの雰囲気や士気を尊重し、学内全体の士気を高め、最高の川澄祭を作り上げるために全力を尽くしていきたいと思っています。実行委員一同、皆様のご来場をお待ちしております。



第55回川澄祭実行委員会メンバー、中央に座っているのが北村さん。皆様のご来場をお待ちしています!

西医体で、女子テニス部が二連覇☆ ゴルフ部の男子2位☆女子3位☆

私たちは普段、男女合わせて約50人の名市大最大級の全学テニス部に所属し練習しています。医学部は私自身を含め部員の半数が大学始めのテニス初心者で、2年前までは最高でベスト16と決して常勝チームではありませんでした。

昨年の優勝から1年間積み重ねてきた練習成果が出せたことを大変嬉しく思います。少人数ですが、チームワークの面ではどこにも負けない自信がありました。

OB、OGの先生方はじめ多くの先生方のご支援あってこそこの結果です。この場を借りて感謝を申し上げますと共に、より一層の応援とご協力を宜しくお願い致します。(医学部硬式庭球部女子主将 M4 富山 奈美)



昨年の優勝記念の部旗前で

ゴルフ部の医学部6年の高島幹展です。8月6～8日に行われた男子西医体、8月11～12日に行われた女子西医体において、男子2位、女子3位になった報告をさせていただきます。

自分が入学した頃は試合も出場出来るかどうかの人数で実力も入賞には程遠い成績でした。ですが、良き先輩、同級生、意気の良い後輩に恵まれ、時には衝突もありましたが、努力を重ねて団結力、実力もつき、今年の試合において選手と応援の気持ちが一つとなり、このような成績を収める事が出来ました。

最後になりますが、自分達ゴルフ部はOBの先生方を始め、多くの方々のご支援、ご協力の上に成り立っています。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。



試合後の集合写真

MD-PhDコースの奨学生が川久保己代子様と面会しました!

6月13日(金)院長室にて浅井研究科長立会いの下、川久保己代子様と私たちMD-PhD在籍学生による面会が行われました。大学3年生から研修医2年目までの学生6名が近況報告をするともに川久保様から激励のお言葉をいただきました。

他学生の近況報告に刺激を受けるとともに、物腰やわらかな川久保様の「いい研究をなさってください、頑張ってください」というお言葉が心に響きました。

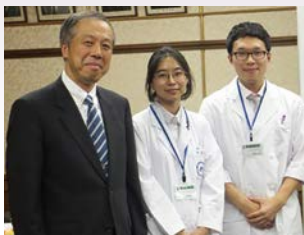
私は現在名市大病院で研修医2年目として働いており、来年度から脳神経生理学教室にて基礎医学研究を再開します。貴重な機会を与えていただけることに感謝し、今後とも臨床・研究に邁進したいと思います。なお今年はMD-PhDコース在籍生が初めて名市大大学院を卒業します。このコースからたくさんの研究医・臨床医が巣立っていることを、また今後ご報告できたらと思います。(文責:西垣 瑠里子)

『川久保基金』とは、川久保己代子様より「医学研究者の人材育成に役立てていただきたい」との趣旨で2009年に創設されたものです。将来、医学研究を担う人材が川久保奨学生の中から一人でも多く育つことを期待しております。



川久保様(写真中央)と浅井研究科長(写真右)と奨学生6名で

韓国ハルリム大学から留学生を迎えました



初日に研究科長室で研究科長と

今年も7月7日(月)から8月1日(金)までの4週間、ハルリム大学から2名の留学生を迎えました。Kang Min Gyuさん(左側写真:右の男性)は脳神経外科学へ、Choi Hyoung Yunさん(左側写真:中央女性)は神経内科学で実習を行いました。

医学研究科・医学部ホームページには二人の留学記が掲載されています。[\(http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/\)](http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/) 二人とも日本で留学生活がとても充実していたことが写真と文面からよく伝わってきます。



実習グループメンバーで名古屋城へ! 武将隊と記念撮影

平成26年度最新医学講座オープンカレッジ 第3期 「高齢化社会・環境変化とともに変貌する呼吸器疾患」

本講座では、主に医学について、本学の各専門分野が蓄積している最新の重要な教育研究情報を、わかりやすく解説します。

【開催日時】 平成26年11月7日～平成27年1月9日
(12/26、1/2を除く金曜日)
午後6時30分～8時 全8回

【開催場所】 桜山キャンパス 医学研究科・医学研究棟11階 講義室A

【募集対象】 一般

【定員】 80名

【受講料】 8,000円 開講初日にお支払いいただきます

【応募方法】 往復はがきまたはeメール

平成26年9月29日(月)～平成26年10月17日(金)

詳細はホームページにて掲載予定

URL:<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/>

問い合わせ先

名古屋市立大学医学部事務局 オープンカレッジ担当

〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 TEL:052-853-8077

eメール:igakubuoc@sec.nagoya-cu.ac.jp

ひとつと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

【受付】〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 E-mail:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp
名古屋市立大学医学部広報誌「一言メッセージ」係宛

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞医(ずい)

発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL(052)853-8077 FAX(052)842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は平成27年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☒
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp または医学部事務局 広報担当まで